第2回 エルトゥールル号からの恩返し

日本復興の光大賞16





特定非営利活動法人 日本トルコ文化交流会

〒107-0052 東京都港区赤坂3-2-7 サムリンビル5F TEL: 03-6441-3120 FAX: 03-6441-3121

協賛:キュチュクバイ・オルキデ株式会社、株式会社バハールエデュケーション、テクノピアン株式会社、

株式会社バハール、株式会社銀座テーラーグループ

後援: 外務省、復興庁、岩手県、宮城県、福島県

特定非営利活動法人 日本トルコ文化交流会 主催



ごあいさつ

「エルトゥールル号からの恩返し 日本復興の光大賞16」は、2011年3月11日に発 生しました東日本大震災の復興支援プロジェクトとして2015年に誕生しました。

東日本大震災は、岩手、宮城、福島の3県を中心に甚大な被害をもたらし、日本の戦後 最大の自然災害となりました。日本トルコ文化交流会(nittoKAI)としては、震災後に 現地に物資を運んだり、数回の炊き出しに行ったり、被災地の子供たちを元気づける ためにトルコ旅行を企画するなど、様々な活動を行ってきました。しかし、2016年で 震災から5年も経ち、復興支援の活動も変わってきています。その中で、nittoKAIと しては、復興のために尽力している日本の民間団体の中から特に優れた団体を選び、 その団体に光を当て、少しでも皆さんの力になれればと思っております。

このイベントのために当初からご指導とご協力いただきました、ジャーナリストの池 上彰様をはじめ、審査委員の方々、また後援団体や協賛企業の方々に心よりお礼を申 し上げます。

これからも日本とトルコの友好関係に役立てるよう努力して参りますので、ご指導と ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



NPO法人 日本トルコ文化交流会 理事長

ウグル ユジェル

目次

ごあいさつ		02
nittoKAIとは		03
日本復興の光大賞16とは		03
概要		03
審査委員紹介		04
審査委員長による講評		05
記者会見		06
受賞団体紹介		10
一般社団法人 大槌メディ	アセンター(大槌新聞)	10
NP0法人みらいと		12
特定非営利活動法人 応援	のしっぽ	14
いわてゆいっこ花巻		16
表彰式レポート		18
来賓からのメッセージ		20
メディア紹介		23

nittoKAIとは

特定非営利活動法人 日本トルコ文化交流会 (nittoKAI) は、様々なバックグラウンドや価値観を持つ人たちが交流し、 互いを認め合い、尊重し合えるような社会空間を作り出したいという理想のもとに、2006年に創設されました。日本と トルコという二国間の関係に限定せず、異なる文化、民族・人種、宗教といった背景を持つ人々が同じ地球市民として 交流・対話できる場を作ることにより、世界平和の促進と実現に貢献することが私たちの望みです。

エルトゥールル号からの恩返し 日本復興の光大賞16とは

営の趣旨

明治時代に日本を訪問したトルコ・オスマン帝国の軍艦エルトゥールル号はその帰途、和歌山県串本町沖で岩礁に激突、 爆発するという大惨事に遭遇しました。地元住民による必死の救助も虚しく587人が死亡、生存者はわずか69人でした。 しかし、日本全国から義援金が寄せられ、生存者は日本の軍艦でトルコまで無事に送還されたのです。トルコ国民は日 本人の厚意に心から感謝し、この出来事は両国友好親善の礎となりました。

2011年3月11日に発生した大地震による東日本大震災は、岩手、宮城、福島の3県を中心に甚大な被害をもたらした、 戦後日本最大の自然災害といわれています。世界中が支援の輪を広げる中、トルコからも官民による支援がなされ、 nittoKAI も数日にわたって炊き出しを行ったり、被災地の子供たちを元気づけるためトルコ旅行に招待したりするなど、 様々な活動に取り組んできました。

しかし 5 年の月日が経ち、震災の記憶の風化が懸念されています。nittoKAI ではエルトゥールル号遭難の際に受けた 支援への恩返しと、友好国・日本の一日も早い復興支援のため、2015年に「日本復興の光大賞 | を創設しました。ジャー ナリスト・池上彰氏の全面的な協力を得て、復興のため地道に尽力している民間団体から特に優れた団体を選び、その 活動や想いを世に広め、さらなる日本・トルコの友好関係発展を願うものです。

選考方法

第 2 回目となる「エルトゥールル号からの恩返し 日本復興の光大賞 16」は、事務局が東日本大震災の復興に携わる 団体等の推薦による東北 3 県のおよそ 50 団体から 37 団体を選出、現地訪問を行いました。さらに事務局と理事長を はじめとする理事のメンバーによる一次審査で、岩手県 14 団体から 5 団体を、宮城県 11 団体から 4 団体を、福島県 12 団体から 5 団体を選出しました。最終的に池上彰氏を審査委員長とする審査委員による 2015 年 12 月 15 日の本 審査会で大賞1団体、特別賞3団体を決定しました。

「選考基準 | は

- (1)地元に密着して、草の根で頑張っている民間団体。人知れず、地道に活動を続けている「縁の下の力持ち」であ る団体に少しでも光を当てる。
- (2)被災地、被災者のために10年、20年、50年と長期的な視点に立って地道に活動している団体とする。活動の 成果が、必ず地元に還元されるように取り組んでいるところとする。

審查委員

審査委員長: ジャーナリスト 池上 彰

ジャーナリスト。1950年長野県生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業後、1973年NHK入局。報道記者として、さまざまな事件、災害、問題などを担当。1994年4月から11年間「週刊こどもニュース」のお父さん役として、様々なニュースを解説。2005年よりフリージャーナリストとして、書籍やテレビなど幅広いメディアで活躍中。2012年4月より16年3月まで東京工業大学大リベラルアーツセンター教授。現在は名城大学教授。主な著書に『伝えるカ』(PHPビジネス新書)、『いま、君たちに一番伝えたいこと』(日本経済新聞出版社)など多数。



審査委員: 女優 宮本信子

女優。1945年北海道生まれ。1963年文学座付属演劇研究所、1964年劇団青芸在籍時に別役実作「三日月の影」で初舞台。1988年「マルサの女」でシカゴ国際映画祭最優秀主演女優賞、第11回日本アカデミー賞最優秀主演女優賞など多数受賞。2007年映画「眉山」(東宝)で第31回日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。2011年「阪急電車 片道15分の奇跡」で、第36回報知映画賞助演女優賞、第35回日本アカデミー賞優秀助演女優賞など多数受賞。2014年、第65回日本放送協会放送文化賞受賞、春の紫綬褒章を受章。



審査委員: 東京大学大学院教授 藤原 帰一

東京大学大学院法学政治学研究科教授。1956年東京生まれ。専門は国際政治、比較政治、東南アジア現代政治。東京大学大学院博士課程を修了し、フルブライト奨学生としてイェール大学博士課程に留学。千葉大学助教授、東京大学社会科学研究所助教授を経て、1999年から現職。主な著書は、『戦争を記憶する』 (講談社)、『デモクラシーの帝国』(岩波書店)、『国際政治』(放送大学教育振興会)、『平和のリアリズム』(岩波書店、第26回石橋湛山賞受賞、改訂版『新編 平和のリアリズム』)、『AERA』連載の映画コラムをまとめた『これは映画だ!』、新しいものに『戦争の条件』(集英社)がある。日本比較政治学会元会長。



審査委員: 特定非営利活動法人難民を助ける会(AAR)理事長 長 有紀枝

立教大学社会学部教授。1963年東京生まれ。早稲田大学政治経済学部政治学科卒、同大学院政治学研究科修士課程修了。1990年よりAARにてボランティア開始、1991年より専従職員に。旧ユーゴスラビア駐在代表、常務理事・事務局次長を経て、専務理事・事務局長(00-03年)。2004年より東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム博士課程に在籍し、2007年博士号取得。2008年7月よりAAR理事長。2010年4月より立教大学教授。著書は「入門人間の安全保障」(中央公論新社)など多数。



審査委員: 福島大学特任研究員 開沼博

福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任研究員。1984年福島県生まれ。東京大学文学部卒。同大学院学際情報学府修士課程修了。読売新聞読書委員。経済産業省資源エネルギー庁総合資源エネルギー調査会原子力小委員会委員。これまでに、福島原発事故独立検証委員会(民間事故調)ワーキンググループメンバー(2011-2012)、復興庁東日本大震災生活復興プロジェクト委員(2013-2014)を歴任。著書は『はじめての福島学』(イースト・プレス)、『漂白される社会』(ダイヤモンド社)など多数。



審査委員: 特定非営利活動法人日本トルコ文化交流会 理事長 ウグル・ユジェル

1972年トルコ生まれ。1995年に文部科学省の国費留学として来日。1995年東京工業大学物理情報工学博士課程を修了。1999年にオリンパス株式会社に入社。2001年から日本ナショナルインスツルメンツ株式会社にてマーケティングマネージャーを務め、現在に至る。2010~2014年青山学院大学で非常勤講師。2011~2014年東京大学で共同研究員。2013年日本工学教育協会からJSEEアワードを受賞。2006年より年日本トルコ文化交流会の理事長を務め、国際交流の推進に尽力する。

池上彰審査委員長による審査経過と講評

あれからまもなく5年が経とうとしています。大勢の方が苦し んでいる、それをなんとかしたいというトルコの方々のお声 がけがあり、去年(2015年)から東日本大震災の復興に尽力 されている方々を応援しようと、この表彰式が始まりました。 nittoKAI事務局がこれまで東日本大震災の復興に取り組ん でいる様々なところに実際に足を運び、地元の評判を聞き、 あるいは具体的な活動内容を精査し、その中から多数の候 補を選びました。その上で、審査委員会でどの人たちに大賞 をあげようか、あるいは表彰しようかということを議論した んですね。全体としては、本当に様々な団体があるわけです。 それこそ甲乙つけがたい活動をしていらっしゃる方は大勢い るわけですけれども、その中で色々長短があるわけです。中 には大々的な活動をして、しばしばメディアに取り上げられ ていたり、あるいは国からの補助金をもらって活動をしたり している人たちもいる。そういう人たちにはわざわざ私たち が激励しなくてもいいよね、というところがありまして、それ よりはあまり光が当たっていないかもしれないけれども、地 道な活動をしている人たちにこそ、私たちが激励をする、あ るいはその活動をみんなに知ってもらう、それが必要なん じゃないかなという観点から、今から、この後、表彰される 方々をお選びしたということです。そしてこの方々の活動ぶ りというのをまた広く社会に知っていただくことで今後の 様々な活動に役立てていただければと思います。

あってはならないことですけれども、南海トラフの巨大地震の 危険性というのもいわれています。地震大国日本では、いずれ 必ずどこかでまた大きな災害が起きる、その時にどのような復 興活動をしたらいいのかという点で皆さん方の活動というの はきっと参考になるだろうということです。そもそもこの取り 組み自体、かつてエルトゥールル号の災害に遭った、遭難をし たというところから始まりました。トルコの人たちがなんとか 恩返しをしたいという思いをずっとお持ちになっていた、それ



がイランイラク戦争の時にはテヘランから脱出できない日本人たちをトルコ航空が救出してくださったという話がありますね。これは映画にもなっています。この時に日本の人たちが感謝を申し上げたら、トルコの人たちが「エルトゥールル号の恩返しです」と発言されたという有名な話があります。そして今またトルコの人たちがこういう形でエルトゥールル号の恩返しをしてくださっている。では今後、私たちはトルコに対してどのような恩返しができるだろうか、こういうところから日本とトルコの友好関係もまた広がっていくのだろうと思います。トルコの人たちの日本への思いに感謝をしながら、そして東日本大震災の現場で努力をしている皆さん方を今日はみんなで一緒に激励をし、あるいはありがとうという感謝の言葉を伝えたいと思っております。今日はどうぞよろしくお願いいたします。



記者会見



池上 「エルトゥールル号からの恩返し 日本復興の光大賞」は、今年(2016年)が2回目ということになります。日本トルコ文化交流会の方々から、エルトゥールル号遭難事故に対して(救助してくれた)日本の人たちに恩返しをしたい、ついては東日本大震災で大きな被害を受けた人たちへなんらかの形で力を与えることができないだろうかという相談を受けまして、では復興のために力を尽くしている方々を表彰して激励しようと去年から始まりました。そして、ここにいらっしゃいます審査委員の方々に声をかけまして、みなさんお忙しいにも関わらず快くお受けいただきました。今日はこの時間には間に合わないのですが宮本信子さんもいらっしゃいまして、審査委員会を結成いたしました。

どのような人に賞をあげようかということですが、本当に草の根で活躍し、あまり大きく取り上げられることがないかもしれないけれども、地道に活動している人たちに、いわばこちらとして光を当てるといいますか、大げさな言い方ですけれどもそういう形で受賞者を、あるいは受賞団体を選ぼうと

いうことです。実際に(nittoKAI)事務局の方々が現地に行き、あるいは現地の人から推薦を受けながら実際に足でまわり、この人たちがいいんじゃないかという資料を作ってくださいまして、その資料をもとに我々審査委員が協議した結果、大賞が1つの団体、そして特別賞が3つの団体に決まったということです。

大賞は大槌メディアセンター、それから特別賞がNPO法人 みらいと、応援のしっぽ、そしていわてゆいっこ花巻です。ひ たすら地道に活動している人たちを選んだということです ね。東日本大震災からの復興がなかなか進んでいない、もち ろん部分的に見ますとそこそこ進んでいるところもあります が、その一方で非常に遅れているところもあります。私たち に一体何ができるだろうかというときに結局は地元に根を 下ろして、自らの力でといいますか、そこに住んでいる人たち の力で復興するしかないんだろうという、そういう人たちを どれだけ応援することができるのかという観点から選んだ ということです。それぞれ審査委員の方々から、一言いただ けますか?

開沼 震災から5年ということで、今、風化という言葉が使われます。それは時間の経過とともに進んでいるものですし、5年の節目報道を終えるとますます急速に冷え込んでいくのが震災の問題なのかなと思います。そういった意味では5年残っているというのも、意外といろいろな形で洗練されて、非常に質の良い根強い活動をしてきている団体になっていますし、また6年目以降に向けてますます力を持って地域に尽くしていただかなければならないのかなと思っております。今回、受賞が4団体に限られますけれども、これがもっと広い意味で被災地を応援する形に繋がっていけば良いのではと思っております。

長 東日本大震災と同じ年にトルコで地震が起きた時に、私たち(難民を助ける会)の職員を派遣し、1名が現地で亡くなるという不幸な出来事がありました。その時にトルコの方々から受けたご恩というか応援の気持ちは、いまだに冷めることがないくらい本当に強いものです。さらに東日本大震災後も、この日本トルコ文化交流会が(応援を)続けてくださっているということが、本当にエルトゥールル号から始まるご縁であり、深いものを感じます。1回で終わらせないという気持ちは本当にありがたいと思います。5年の節目というのは外にいる人たちが感じるものであって、実際に被災された方たちには通過点のひとつにすぎないからこそ、こういう賞で皆様を応援できるということを嬉しく思います。

藤原 トルコに住む人たち、そして日本に住む人たち、ふたつの社会と社会の友好関係をはぐくんでいく上で日本トルコ文化交流会は大変功績を果たしてこられたと思います。この選考会に関わることとなったのですが、さすがに(震災から)5年も経つと持続力が問われることになる。良い団体しか残っていないんですね。持続力のある団体は、本当に頭が下がる貢献をしてらっしゃる方々ばかりです。どれも非常に小規模で地味、この日本トルコ文化交流会の活動も地味ですけれども、そのような地味なところから、かつて長洲一二さんが使われた言葉ですが「民際」、国際という国家と国家の交流ではなくて、社会をつなぐ「民際」という視点が出てくる

のかなと思います。このような選考会に関わることができた のを大変光栄に思います。

ユジェル 東日本大震災から5年も経っている中で、今回 (東北3県の)37団体を半年かけて、週末に当会事務局のスタッフや理事をはじめとするメンバーが現地訪問し、皆さんの活動を拝見することができました。37団体はどこもモチベーションが高くて、皆さんに賞をあげたいくらいでしたが、最終的に審査会で大賞1団体と特別賞3団体を選ばせていただきました。5年経った今でも、皆さんによる活動のレベルが非常に高く、彼らが日本を支えてくれているんだなということが実感できました。



質疑応答

Q: 大賞に選ばれた一般社団法人大槌メディアセンターは大 槌新聞を発行しているということですが、大賞に選ばれた理 由を簡単に教えてください。

池上 とにかく色々な団体が活動されていて、本当にどの団体に大賞をあげようかと、審査委員会でも色々議論をしたのですけれども、やはり津波で大変大きな被害を受けた大槌というのがとりわけ町づくりに苦戦しているわけですね。その中で様々な報道機関というのがもちろん(情報を)伝えるのですけれども、やはり大手の新聞社にしても、あるいはテレビ局にしても、ある程度広い範囲の情報を伝えるしかありません。もちろん町の広報誌もありますが、町の広報誌というのと、客観的に情報を伝えるメディアの役割というのは違うだろうということですね。そこで本当に、町民の人たちが求められている情報をきちんと伝えるという(メディアの)本来の役割をはたしていらっしゃるところが素晴らしいなということで満場一致で大賞を差し上げることになったということです。

Q:今回、福島県新地の「NPO法人みらいと」が特別賞に選ばれた理由を教えてください。

池上 地域の子ども達、福島の未来を築いていくのは子ども達だろうということですね。子ども達を集めて様々な活動をしていたり、様々な情報を伝えたり、あるいは住民代表として行政に物申したり、そういう非常に地道な活動をしているということです。さきほどから地味なと申し上げていますけど、派手な活動ではないのかもしれないですけど、地に根を張った地道な活動こそが、これからの福島を復興させていく力になるのではないかという観点から選ばせていただいたということです。

Q:いわてゆいっこ花巻と応援のしっぽが選ばれた理由について教えてください。

池上 いわてゆいっこ花巻は任意団体なんですね。他が NPO法人だったりする中で、あえて任意団体として、とりわけ高齢者が多かったりするわけですが、地元の人に寄り添う形で活動をしていらっしゃる真摯な取り組みが評価されたということだと思います。石巻の応援のしっぽは、NPOを組織していらっしゃるわけですが、非常に職員の数が少ない中で、特に仮設住宅でのコミュニティー作りというのは難しいことがあるわけですけれども、そこへの協力に取り組んでい

らっしゃるという点が評価されたということだと思います。

Q:審査委員の皆さんはお忙しいのに、何故(「日本復興の光 大賞」を)サポートされているのでしょうか。

開沼 私は、復興支援は大学の立場からの職責ですので、復興をいかに盛り上げるかというのは仕事としてやっていかなければならないというのが第一ですけれども、やはりそれ以上に(東日本大)震災の問題というのは、阪神淡路や他の災害と違って、東北の、日本の中でも中心か周辺かといえば周辺にある問題だと思うのです。ともすれば特殊な問題だと思われてしまうことだと思います。岩手の沿岸部なんて行ったことないなと言われて終わってしまうとだめで、ここに日本の様々な少子化、高齢化、あるいは地方が衰退していく問題の解決策の未来があるんだと、そういう部分に光を当てていく、つまり特殊な問題で終わらせない、普遍的な問題であり、そこに希望があるんだということを示していく素晴らしい賞だと思って協力させていただいています。

長 私自身も難民を助ける会の理事長として被災地支援、特に障害のある方たちの支援に携わっています。復興コーディネートを引き受けたりもしています。私共は国際協力をするNGOなのですが、母国で起きた災害に今後も支援活動を続けてまいる所存なのですが、トルコの方たちが同じような視線でご支援くださっているということは本当にありがたいと思っておりまして、そのことに関われるということを本当に光栄に思っております。

藤原 これはもう、私が是非やりたい仕事でした。トルコと日本の友好関係をはぐくんでいくべきだ、はぐくみたい、手伝いたいという気持ちがあるのですが、トルコと日本の友好関係の多くは政府と政府の関係なんですね。政府でなければ(日本の)企業がトルコでどういう商売をするかとか、あるいはトルコの企業が日本で何を売るかとか、大事ですけれど、そこで終わる。そうではなくて、日本の社会を支援するということをトルコの皆さんが考えてくださって、こんな嬉しいことはありません。そういう意味で、これまでの国際交流と視点の違った交流として、喜んでお手伝いしていきたいと思っています。





池上 トルコも日本も地震の多い国ですよね。どちらも被害がある。トルコの人たちも地震をこれまで経験しているからこそ、日本の人たちが地震で苦しんでいるということを共感していただけるのではないかと思いますし、エルトゥールル号のことからずっと親日的な感情をお持ちいただいて、イラン・イラク戦争の時にトルコ航空が日本人を救出してくださったという有名なエピソードもあります。トルコの人たちがいつも日本の人たちに熱い思いを持ってくださっていることに日ごろから感謝していましたので、東日本大震災の時になんらかの形でお役に立ちたいんだというトルコの人たちの話を聞いて感動しまして、これはお手伝いをしなければということで、協力するようになりました。

Q:37団体の中で、賞を選ばれたわけですが、それ以外の団体も審査されました。そこから得たものを教えてください。

開沼 私は常に現場に出入りしながら研究や復興支援活動をやっています。無数の活動があり、玉石混淆です。普段はそうした様々な活動をその場その場でしか処理していませんが、それを一覧することができる、また詳細を検討してみるということは、3年目、4年目でこういう形で進んできたんだなというのが去年の感覚で、さらに今年5年目でその差分をとることができたのはとても大きかったです。今必要なことは何なのか、こういうところが生き残ってきているんだなということが、次の災害等への教訓にもなっていくのかなと思っております。

長 東日本大震災で多くの団体が、(被災地の)地元の力で作り上げられました。私たちが海外で国際協力をする時に、地元のオーナーシップとか主体性ということをよく言うのですが、この震災の現場で、カタカナのオーナーシップに一切頼らずに復興と被災と闘う一番の力は地元からくるんだというのを見せてくださる団体さんが3県ともにとても多かったと思っています。

藤原 審査委員なんて偉そうなことを言っていますけど、審 査は大学の試験に成績をつけるのと全く違います。審査で はなく、ただひたすら頭が下がる、教わるという経験でした。 本当に政府とか役人とかの仕事を見ているのとは全く違う ボランティアの作業ですから、その中で何で基準を設けることができるのかというと、自分がやはり応援したいということですね。こういう作業を是非続けてもらいたい、頑張ってもらいたいという私共からのメッセージだという意味があっての選考だとご理解いただければと思います。

池上 こうやってあらためて団体を見ると、こういう活動で生き残ってきたのか、あるいはこういう活動が求められているのか、復興支援と一言で言ってしまうわけですけれども、何が求められているのかということを知る、非常に勉強になったということがあります。中には国から補助金をもらって大々的にやってる団体もあるわけですね。そういうところは我々がわざわざ表彰しなくても良いだろうという思いがあり、そうではないけれど、ちゃんと地道にやっているところを選ぼうというのがコンセンサスとしてあったかなと思います。

Q:被災地にいると資金面では不足していて活動も先細りしています。5年目以降、官民とも興味が薄れていますが、こんなことをすれば団体も生き残っていけるのではないかということがあれば教えてください。

開沼 この賞の存在自体、非常に意味のあることだと思っています。というのは2つ効果があり、まず資金的効果があるというところです。行政では集中復興期間は5~6年間かかるだろうと言っていて、ここに6兆円入っていた(助成金)が先ぼそるというか、おそらく大幅に切られます。その一部は当然、NPOと市民活動への助成等にまわっていたわけですけれども、そこから切られていくのは非常に大きいのではないかというところに、助成というか賞金が入っていく、あるいは注目が集っていくというのが重要ではないかという点です。

もう1点が、知らせていくという効果で、今後、報道(関係者)



や研究者が、(被災地に)入っていくのは激減していくと思います。そこをどういう風に拾い上げて広げていくのか、賞もやって、記者会見もやって、イベントもやって、また、被災地に行って来ましたという節目報道とは別の形で成功事例を表面化させていくことは非常に重要です。行政予算のない時に、あそこはああいう風にやっているんだ、だったらうちもまねしようという動きがあり、成功事例が連鎖していくような形を皆で作っていくことが重要だと思っています。

池上 補足をしますと、いずれ南海トラフによる巨大地震が起きるかもしれない、他の地域でも大きな災害が起きるかもしれない、そういう時に復興活動をどうすればいいのか、まったく経験がない人たちにとって、東日本大震災での様々な復興活動というのが、やはりヒントになるのではないかと思うわけですね。表彰は今回が2回目ですけれども、これはトルコの方々とのご相談ですけれど、まだ続けていきたいという意欲もおありのようですから、こちらとしても息長くそれに光を当てていくということが必要なことではないかなということです。



一般社団法人 大槌メディアセンター(大槌新聞)

http://otsuchishimbun.com/

設立年月: 2015年2月 倉本栄一 代表: 所在地: 岩手県大槌町

東日本大震災で生じた情報不足を解消するため、町内には新聞 や臨時災害放送局などのメディアが新しく生まれました。ただ、 各媒体は別の団体で運営され、いずれも国の助成金を活用して いたため、将来にわたり持続的に運営できる仕組み作りが必要 でした。各媒体がメディアミックスをし、さらには行政とも連携 するための受け皿となるべく、2015年2月、団体を立ち上げま

大槌新聞は2012年6月に創刊しました。大槌町の近隣4市町を カバーしていた「岩手東海新聞」が震災で廃刊し、町の情報は全 国紙や県紙に頼らざるを得ませんでした。団体の設立メンバー



である菊池由貴子は「町民が町民に、町の情報を優しく伝える町 の新聞が必要だ」と思い、未経験ながらも新聞を作り始めまし

2015年夏の町長選挙で、メディアセンター構想に賛同してい た碇川前町長が落選。平野新町長の事業見直しによる新聞への 助成金打ち切りなどから、同構想は失敗に終わりました。それで も「町のメディアを絶やすまい」と、大槌新聞は2016年4月に 独立。菊池が取材・編集に加え、事務や経理、営業なども1人で こなす「大槌新聞社」を立ち上げました。広告や支援を募りなが ら、可能な限り町内全戸への無料配布継続を目指します。

主な活動内容







大槌新聞

2012年6月創刊。タブロイド判4または8ページの週刊新聞(第5週は休刊)です。 字は大きく「ですます」調で、わかりやすい表現を心掛けています。創刊以来、一度も 休むことなく発行し続け、2016年3月末には181号を数えました。町内全戸に無料 配布をし、町の新聞として定着しています。町外の購読希望者には、有料で郵送してい ます。

大槌新聞は一般的なミニコミ紙とは異なり、住宅再建などの復興情報がメインです。行 政や議会の記事も取り上げ、町の課題を指摘します。町民が町の将来に希望を持てるよ う、題字の下には「大槌町は絶対にいい町になります」と毎号、赤い字で書いています。

大槌ぶんこ

「大きな災害の後には新しい文化が生まれる」との思いから、出版部門「大槌ぶんこ」 を 2014 年に創設しました。大槌新聞縮刷版や、被災遺族の短歌集「小畑幸子」小畑 太刀 生きた証」、朝日新聞大槌駐在を3年間務めた東野真和記者が綴った「駐在記者 発 大槌町震災3年目の365日」など、これまでに計3冊を出版しています。紙面で は伝えきれない町の歴史や文化を、今後も発信し続けます。

活動において評価された点



審查委員長 池上彰氏



被災地に必要な「情報 |を伝え、 歴史に残すための価値ある仕事

人が災害に遭ったときに何が必要とされているのか。まずは身の安全を守る場所ですね。そして食 事であり、水です。食べ物、水が必要とされます。その次に必要なものは何だろうか。私はそれは情 報だと思うのですね。いま行政は何をしているのか、政治は何をしているのか、あるいは私たちの身 の回りの人たちは何をしているのか。人は情報を求めます。それが生きていく糧になるんだろうと 思うのです。ところが残念なことにマスメディアというのは、まさにマス、多くの人に伝えるもので す。新聞にしてもテレビにしても、あくまで大勢の人を対象にしています。しかし、その情報も必要 ですけれども、それぞれの被災者にとっては、自分の身の周りで何が起きているのか、これからどの ようなことがあるのか、ということを本当は必要としているわけですね。その部分が充分なかなか 伝えられないという問題点があります。行政がやがて落ち着いてきますと、行政の広報、町の広報と いうのが出てきますけれども、これはあくまで行政の立場ですね。そこに暮らしている人たちに客 観的に必要な情報を伝える、そういうものが求められているのだと思うのです。

受賞された団体、大槌メディアセンターは、「メディアセンター」という大きな組織であるかのよう な名前になっていますが、実は本当にごくわずかの人たちによって成り立っている新聞なんです ね。大槌の町で何が起きているのかということをきちんと伝えている、毎週欠かさず発行されてい る新聞です。それを改めて見ますと、被災者には何が求められているのか、あるいはどのような情報 が必要とされているのかということが客観的なデータとしてこれは保存されるんですね。毎週毎週 の新聞は大槌の町民の人たちにとって大変役に立つものですが、それが縮刷版という形できちっと 残りますと、これからメディアに携わる者として、被災者に何を伝えていけばいいんだろうかとい うことのヒントを与えてくれる、そういう意味でも非常に歴史的な価値のあるものをお作りになっ ているのではないかということです。これをぜひ皆さんに知っていただきたいという審査委員の思 いもあり大賞に選ばせていただきました。おめでとうございます。

受賞者コメント

大槌新聞は町の情報に特化しています。今皆さんが知りたい復興情報です。宅地がどこ にできるのか、病院、公共施設がどこに建つのか。どういう町づくりになっているの か。はじめは大槌町の情報を届けることしか考えていませんでした。それが1年たって くると、この町の課題がおぼろげながら見えてきます。そして最近特に思うのが、大槌 町は絶対にいい町になるんだということです。うちの町では被災率が高く甚大な被害 を受けましたけれども、子どもからお年寄りまでおもしろい方がたくさんいて、皆さん 本当に頑張っています。大槌高校生なども頑張っていて、希望を見せていただきます。 今回、賞をいただくということでnittoKAIのホームページを拝見しました。恥ずか しいのですが、トルコのことを本当に知らなくて、トルコのメディアもいろいろ大 変だということを目にしました。メディアも政治も本来は地域のためにあると思い ます。それがいつしか大きくなり、地域を離れると、メディアのためのメディア、政 治のための政治になるのではないかと、被災地で新聞を書いていると思います。政 治に関わる方々、メディアの方々には、(自らは)地域のためにあるんだという本来 の目的、原点に立ち返っていただき、(地域をよくすることで)この日本をよくする、 そして日本をよくすることで世界をよくするということになれば、と思います。今 回はありがとうございました。



一般社団法人 大槌メディアセンター 菊池由貴子さん

特別賞

NPO法人みらいと

http://www.miraito.info/

設立年月: 2012年8月 目黒博樹 代表:

所在地: 福島県相馬郡新地町

私たちは、地域の共感を得ながら、自分たちの町は自分たち でつくるという意識を高め、住民と行政との協働を発展させ、 元気な町づくりの実現に寄与することを目的に設立いたしま した。

東日本大震災後は、被災者支援活動に力を入れつつも、いろ いろな経験により自信を持って羽ばたける子どもたちを育成 したいとの想いから、地域の子どもたちを集め、近隣寺院協 力の元、座禅会を開催したり、外国人講師を招いての交流イ ベントを実施することにより、失いかけた子どもたちのコミ ュニティ再生を図る為の活動を開催。また、スポーツを通じ



て地域の大人と子どもの新しいコミュニティを創造、他にも 被災高齢者住宅見廻り事業、行政が主体となり進める、被災 沿岸部への防災緑地公園整備事業ワークショップなどにも積 極的に参加、運営協力することにより、町の復興、今後の町 づくりへと幅広く活動を展開しております。

今後も、長期的かつ継続的な活動を行うため、地域を担う若 い世代との交流や人材育成にも力を入れていきたいと思って おります。

主な活動内容



高齢者住宅見回り事業

年齢と共に衰えがちな食欲や、支度が面倒などの理由により、食事回数が減ったり、栄養 の偏りなどを防ぐため、高齢者の皆さんのもとへ、支援物資を届けながら毎週水・木曜日 の夕方に声かけ・見回り活動をしています。

巡回活動により、普段の生活の中での困り事や嬉しかったこと。会話のなかで得られる情 報をWebや定期発行誌などにより発信し、皆さんに関心を高めてもらい、地域全体で高 齢者を支える仕組みづくりの基礎となることを願い活動しています。



まちづくりワークショップ

「いつまでも下を向いてばかりではいられない!」と、地域住民を中心としたワークショ ップにより、未来の新地町の姿を思い描き話し合い、実践に向けて勉強会などを行う活動 です。これまでも「新地町に若者が集まる○○をつくろう作戦会議」などを開催してきま したが、2014年からは新地駅前プロジェクトのサポートをさせてもらっています。





お寺は人々が集い子どもたちの遊び場でもあった。そんなお寺で地域の子どもたちの健 全育成と交流促進を目的に始まった企画が毎年開催している「こども座禅会」です。 座禅や写経の他、紙芝居や昔遊び・夜には肝試しなど普段できない体験を通じて、みんな と共に過ごす半日は子どもたちを大きく成長させてくれます。地元高校生ボランティア や、地域の大人と過ごす一日は子どもたちにとって見守られている安心感を与えている 事にも繋がります。

活動において評価された点



審査委員 開沼博氏



不利な状況下でも負けない 新地町の若者が担う支援活動

みらいとさん、この度は受賞おめでとうございます。みらいとさんは幅広い活動をされていま す。若い人たち、子供たち向けの学びの場、楽しみの場を作っている、あるいは高齢者の方、避 難している方に向けての見回り活動をしていらっしゃる。「みらいと新聞」という新聞を作っ て、様々な震災の時の記憶を書き起こしたり、あるいは色々な地域での地域づくりのワーク ショップなどに協力をされたりしているということです。

昨年、この賞で福島からは南相馬市の団体と浪江町の団体が受賞しました。もしかしたら南相馬 や浪江などより原発に近い場所にある自治体に比べたら、新地町はここにありますといえる方は 県外だと多くないかもしれません。新地町は福島県の北側にあります。もしかしたらメディアで はあまり名前を聞いたことがない方がいるかもしれませんけれど、津波被害が非常に大きな場所 でした。もちろん原発の事故の影響も大きくありました。それなのに被災地の中でも注目を浴び づらい、それはすなわちボランティアの数とか、助成金がちゃんと来るのかなど、そういった問 題に直結していたと思います。ある面では不利な状況の中で、多大なご尽力があったゆえに、こ こまで根強い活動を広くされてきたんだと思いました。

この団体の活動パンフレットでは楽しそうな写真が使われています。若い人がこの団体を担って いることが見てわかります。他の地域でも高齢化していますが、若い人がこういう市民団体を続 けるということ、実際は本当にいろいろな苦労があったんだろうというふうに思っています。こ ういう活動が今後も続いていくこと、そして、みらいとさんが作ってきたような成功事例がほか の様々な被災地に限らない、過疎地域を支えていくような一つの成功事例になっていけばと思い ました。今後とも活動を応援しております。

受賞者コメント

本日はこのようなすばらしい賞をいただきまして、ありがとうございます。僕たち の暮らす新地町は福島県の浜通りの最北、人口8,000人ほどの小さな町です。当初 は外部からの注目も支援も少なく、「忘れられた町」と海外メディアから取材が入る ほどでした。そんな中、自分たちの力で被災者支援を始められないかと、それぞれの 仕事の合間や夜間、休日を利用して、16人の仲間で活動をスタートさせました。仲 間の中には震災によって家族や親戚を失った者もいれば、原発によって家を追われ た者、津波によって家を失った者もおります。それでもまだ自分はやれる、まだ心に 余裕が残っているぞと立ち上がった仲間が集りました。震災直後は絶望し、うつむ いた住民が町にあふれ、そんな中、自分自身もくじけそうになったことがいくらで もあります。それでも仲間同士励ましあい、自分で立ち上がることができない住民 に寄り添った活動を心がけた5年間でした。

今日いただいた賞はそんな僕たちに「お疲れさま。これからもまだまだ頑張れよ」と エールをもらったような気がします。これからも僕たちNPO法人みらいとは、一つ でも多くの笑顔を取り戻すため、そして次世代につなぐ、残す町づくりに頑張って いきたいと思います。この場にお招きいただきました皆様に心より感謝いたしま す。本日は誠にありがとうございました。



NPO法人みらいと 理事長 目黒博樹さん

特別賞

特定非営利活動法人 応援のしっぽ

http://oennoshippo.org/

2011年10月20日 設立年月: 廣部知森 代表理事: 所在地: 宮城県石巻市

「応援するということに親しみ、続けて、文化とする」 支援ではなく、応援。追いかけるものは、実は自分のうしろについ ているものかもしれないという含みでしっぽ。応援のしっぽは、 2011年10月、宮城県石巻市の大川小学校学区で被災拾得物返 却ボランティアをしていた代表が手探りで立ち上げた団体です。 当時、石巻では100を超える支援団体が活動していましたが、 その99%は県外団体であり、2011年の夏には既にいつ撤退す るかという話題がありました。しかし、その莫大な活動量が一気 になくなることに対する被災地の影響は計り知れず、地元スタ ッフへと運営の移管や、肩代わりとなる地元の活動が増えてき



ました。そういった地域密着型の小さな活動に対して、資金を集 める相談にのったり、ボランティアをつなげたり、作ったものを 販売したり、活動している団体同士をつなげたりしていました。 現在、仮設住宅や在宅避難されている方々の手しごとコミュニ ティーと出会い、そこを重点的に支援しているさまざまな支援 団体の協力のおかげで、応援したい方とされたい方をつなげる 活動を行っています。

自分とコミュニティーの仲間の笑顔と誇りのために震災記憶の 風化に抗い、活動を続けようする人たちのエネルギーこそが、復 興という概念に最も近いのではないかと考えています。

主な活動内容





被災地応援サイト「応援もなか」の運営

情報を発信し、寄付を集め、商品を購入できるサイト「応援もなか」を運営しています。 サイトには、登録団体のブログなどがまとめて掲載してあり、今を知ることができるよ うになっています。また、各団体への定期的な寄付もできるようになり、手作り商品な ども掲載してあるので、新商品などの購入に便利です。

手しごとコミュニティーの手作り商品カタログ製作、 受注発送センターの運営

約25のコミュニティー団体の手作り商品カタログを制作しています。年2回発刊して おり、最新号は 2016 年 1 月発刊の VOL.5 です。また、そういった各コミュニティー の商品をまとめて購入したいという利用者の方々の意見と、電話やメール受注や書類の 発行に対応しがたいコミュニティーの要望もあり、窓口となる受注発送センターの運営 も行っています。

活動相談・コーディネートなど

最初期から行ってきた根本的な活動ですが、応援対象団体の中身をよく知り、相談にの り、逆に相談にのってもらいながら、さまざまなマッチング需要に対応しています。相 談はお金のことから人間関係まで、外には出せないけれどとても大切なことばかり。マ ッチングに関しては、支援活動を行いたいボランティアコーディネートから、被災地ツ アーコーディネート、購入だけではない定期的な商品開発ボランティアコーディネート など多岐にわたります。

活動において評価された点



審査委員 藤原帰一氏



被災者と支援者をつなぐ 手仕事コミュニティーの運営支援

今回は二回目の審査になりますが、私は審査するなどという、偉い立場ではないということを改 めて思い知らされた仕事でした。本当に皆さん大変な努力をしていらっしゃることが胸に染みて くるようなそういう時間でした。

応援のしっぽの活動の中心はコミュニティーの支援です。被災から5年経ってもなお仮設住宅など 避難者のコミュニティーで苦しい生活を強いられている方々がたくさんいらっしゃいます。この コミュニティーの支援に力を注ぐ、どこからお金をとってくることができるだろうかという点 で、様々な手工芸品を作ってそれを販売するという活動があります。しかしながら手作りですと なかなか、だれにどう、それを売ることができるのかわからない、そこでその手工芸品を作って いらっしゃる方々と宮城の生協と協力して、手工芸品を被災していない人の手元に届けていく、 そのような活動をされてきました。

このようにコミュニティーを支援するという仕事、そして被災者と被災していない人を結んでい くという仕事、この2つの作業を非常に地道に続けてこられたことを私共は大変、尊敬とともに評 価するということでございます。

受賞者コメント

主催者の方々、審査委員の方々、関係者の方々に厚くお礼申し上げます。応援のしっ ぽは本当に小さな団体で、関係団体、協力してくださる団体がたくさんあります。か つ、こちらが応援していると思っている、手仕事コミュニティーの方々、おばちゃん やおばあちゃんなどからも、支援、応援していただいて応援のしっぽは存在し、いま まで活動を続けてこられました。本当に皆様にお礼申し上げたい気持ちでいっぱい です。

なぜ手仕事コミュニティーか。「物を作って売るのは商売じゃないか」とよく言われ ます。しかし「作って売る」ということは社会に参加するうえで非常に普遍的な活動 だと思います。そこに「仲間と一緒に」が入ってくると、前向きになれる、人見知りで 何も話したくなくても何かを作っているときは心が透明になれる瞬間があります。 そのため手仕事コミュニティーを応援していくことになっていきました。

震災から5年経ち、10年後には(こうした活動も)なくなっているんじゃないかとよ く言われます。それはそうかもしれません。ただ、おばちゃん、おばあちゃんたちの エネルギーは、「悲しいこともつらいこともあったけれど、それでも仲間と笑える」 という、希望を復興に向けていく前向きになるエネルギーなのではないかと思って います。応援のしっぽを色々な方が応援してくれているので、このように受賞がで きたと思っています。皆様今後ともご協力よろしくお願いします。



特定非営利法人 応援のしっぽ 代表理事 廣部知森さん

特別賞

いわてゆいっこ花巻

http://hanamaki.yuicco.com/

設立年月: 2011年3月 大桐啓三 代表: 所在地: 岩手県花巻市

内陸の花巻市内に震災被災者用の「みなし仮設住宅」が認めら れ、被災者が生活物資を受け取りに来られました。その時にご家 族の様子を聞いて書きとめた記録が、支援台帳の基盤になって います。被災地域には行政からの支援や、ボランティア団体の支 援が月を追うごとに増えました。資金的に限界があったため、沿 岸と花巻市内の両方で支援を続けるか、花巻市内の支援に集中 するか、選択が迫られました。内陸避難者への支援は私達にしか できないと決断し、団体の意見集約を図り現在に至っています。 花巻市内で私たちが手掛けてきた活動は、高齢単身者・高齢家族 への訪問や、補助を必要とする世帯・軽度要介護者などを見守る



気がかり訪問活動、震災ストレスによるうつ病者やPTSD・引き こもり者の発見と専門医療機関への結び付ける活動などと、楽 しいイベント活動です。沿岸地域と異なり花巻では、年とともに 震災や被災者の存在が忘れられていきます。みなし仮設住宅の 制度が廃止されるのが2018年度と想定し、被災者の自立を促 しています。自立する被災者は一般市民の中に入ることになり ます。被災者が定着する地域の市民を招待し、被災者と一緒に楽 しんでいただく「バスツアー」、ともに汗を流す「野菜づくり」な どの「友達づくり作戦」を進めています。被災者が地域コミュニ ティーへ融合し、定着できることが目標です。

主な活動内容



バスツアー

沿岸から突然避難してきた被災者が、内陸花巻に適応することは容易ではなかったと想 像できます。家と生活用品を全て失った避難生活です。家族を失って傷ついている人もお られ、都会へ働きに行った若い世帯との別れもありました。私たちは、県内の各所を訪ね るバスツアーを内陸生活への適応活動にとり入れました。出発前に偶然出会った二人が、 隣り合わせの座席になって語り始める身の上話が、その後の友達の輪を広げています。



ママ・グランマを支える

津波で夫を失った母、あるいは妻を失った父やおばあちゃん。もちろん両親が元気で無事 でも、「子育て」は大変な課題です。昔の大家族では、子供は家族の中で自然に育ちました。 家族が小さくなり、あるいは夫婦だけになると子育ては一層難しくなるようです。そんな お母さんやおばあちゃんの子供をスタッフが抱っこしている間に、ママたちが助産師さ んに悩み事を相談して、指導を受ける「ママ・グランマのお茶会」があります。



被災者から、自給自足の真似事をしたいとお話がありました。宮沢賢治の「下の畑」の「と なり」の畑が空いているとの情報がありました。農機具を持ち寄ってとなりの畑で作業を 始め、次の年には、北上川の河川敷に移動し、その次には別の会員の広い農地も借りるこ とになりました。それぞれ畑の持ち主に、大型トラクターで耕してもらい、私たちは太陽 のもとで汗をかきながら飛び回ります。雨の日は花巻温泉で打ち合わせ会です。

活動において評価された点



審查委員 長 有紀枝氏



内陸避難者に向け 自立を視野に入れた支援活動

ゆいっこ花巻さんは震災の3日後、発災当初に地元の方たちがつくられた組織です。まずは被災 されている沿岸地域の支援を開始し、その後すぐに沿岸から内陸の方に、花巻の方へ逃げてこら れている方たちへの支援も開始されました。

ゆいっこ花巻さんは、両方の地域の支援をしていかれる中で、比較的多くの支援が浜=被災地の 方に集っているのに対し、内陸の方に逃げてこられた方たちへの支援は、どうしても少なくなる という事実に気づかれます。そして、徐々に活動の中心を内陸の方に動かしていかれました。内 陸部ではみなし仮設に入っておられる老若男女の方々に、それぞれの方たちに合うさまざまな支 援を実施されてこられました。

心の病に苦しんでいる方たちには専門的なご支援や傾聴活動を、元気な方々にはさらに元気に なっていただけるような活動を精力的にされておられます。また5年が経過して、いずれ、みな し仮設からも出て行かなくてはならなくなるときが来るということで、その日を2018年になる だろうと定めて、その時の完全な自立に向けたお手伝いもされています。こうした様々な活動を 私どもは讃えさせていただきたいと思い、選ばせていただきました。

受賞者コメント

この度は「日本復興の光大賞 16」特別賞をいただき、厚くお礼を申し上げます。 トルコと日本は 125 年前のエルトゥールル号の遭難より今日まで、真心のキャッ チボールを続けてきた間柄です。5年前の東日本大震災でもトルコと日本トルコ文 化交流会は被災者の心に寄り添ってくださいました。私たち、いわてゆいっこ花 巻も被災者の心に寄り添う活動に心がけています。

いわてゆいっこ花巻の会員の多くは高齢者です。お墓をどうするか、沿岸に帰ろ うか、それとも花巻に定住するか、住民票を移すか、冬でも雪が積もらない沿岸 と異なり、花巻での雪かきをどうしようか、病院はどこへ行ったらいいかなど、 こういった課題を一つずつ調べて大きな活字の「ゆいっこ新聞」でいろいろ情報 を届けています。ゆいっこ花巻の被災者会員が高齢者なら、実はスタッフの大半 も高齢者です。60代、70代の高齢者がスタッフの中におりまして、50代は2、 3人しかいません。本当に年配者がスタッフになっております。市内定住の被災者、 支援者の垣根をとり払って、今後ゆいっこ花巻はご近所さんとなったり、友人と なったりして助け合って暮らしていきたいと思っています。私たちのようなこん な小さな団体でも見ていてくれる人がいるということは今後の活動への大きな励 みとなります。本当にありがとうございます。



いわてゆいっこ花巻 共同代表 鈴木 富士子さん





表彰式レポート

2016年3月3日(木)、明治記念館にて 「エルトゥールル号からの恩返し 日本復興の光大賞16」表彰式が行われました。





(上)前列右から、「応援のしっぽ」の廣部知森さん、「みらいと」の目黒博樹さん、「大槌メディアセンター」の菊池由貴子さん、「いわてゆいっこ花巻」の鈴木富士子さん。後列右から、藤原帰一氏、開沼博氏、池上彰氏、長有紀枝氏、ウグル・ユジェル氏。

(中) 神宮前小学校と神宮前インターナショ ナルエクスチェンジスクールの生徒たち

(下) 生徒たちとともに歌う歌手のAsamiさん

東日本大震災の犠牲者への黙祷から始 まった表彰式は、森本智子テレビ東京 アナウンサー司会進行により執り行わ れました。

来賓からの祝辞を賜ったのち、池上彰 審査委員長による審査講評、引き続き 審査委員が受賞者を表彰しました。

「日本復興の光大賞 16」大賞を受賞 した「一般社団法人 大槌メディアセ ンター」には賞状とエルトゥールル号 の彫られたトロフィー、賞金 100 万円 が、特別賞に選ばれた「いわてゆいっ こ花巻」、「特定非営利活動法人 応 援のしっぽ」、「NPO 法人みらいと」 の 3 団体には、それぞれ賞状とトロフ ィー、賞金30万円が授与されました。 表彰後には、神宮前小学校と神宮前イ ンターナショナルエクスチェンジスク ールの生徒たちが復興支援ソング「花 は咲く」、「Memleketim(私のふるさ と)」、「Happy」の3曲を披露、歌手 の Asami さんも加わり、大いに盛り 上がる中、式は幕を閉じました。

懇親会は、トルコとも縁の深い、小池百合子衆議院議員が演壇に上がり、「受賞者の皆様、これ(受賞)を励みに、さらに復興にご尽力いただければと思います。また審査にあたられた池上審査員長をはじめ審査委員の皆様も、本当にご苦労様でございました。苦しいときは真の友、トルコと日本は100年以上にわたり友好関係を築いてきました。これからは楽しみ、幸せを分かち合う仲間であればと思っております」との乾杯の祝辞により始まりました。

会場ではトルコ料理が振る舞われ、ダンスグループIKUYO&Hal Kelebek によるトルコ民族舞踊も披露されるなど、多くの参加者が、この温かな友情に包まれた会を楽しみました。









(左上) 乾杯の音頭をとる小池百合子衆議院議員

____ (右上)ビュッフェ形式で並べられた料理の数々

(中央) トルコ舞踊を披露するIKUYO&Hal Kelebek

(左下) 池上彰氏、長有紀枝氏を囲んで記念撮影

(右下) 森本智子テレビ東京アナウンサーを囲んで記念撮影



審査委員 宮本信子氏

受賞団体の選出に審査委員として携われた女優の宮本信子さんが、お仕事の忙しい中、表彰式に 駆けつけてくださいました。

「今日は仕事の都合で遅くなってしまい、失礼をいたしました。先ほどの受賞者の方のスピーチが素晴らしかったというお話を伺って、その場にいられなかったことを非常に残念に思っております。受賞なさった皆様、本当におめでとうございます。今迄のたくさんの大変なご苦労と、そのことを続けていくための困難、これから先ももっともっとおありになるかと思いますけれど、どうぞ健康に気をつけて頑張っていただきたいと思います。そして、今持っていらっしゃる情熱を、若い次の(担い手に)バトンを渡していただけたら、こんなに素晴らしいことはないと思っております。本当に受賞者の皆様、おめでとうございました。」

来賓からのメッセージ



衆議院議員 秋葉 賢也氏

震災から5年経ち、今、2つの「風」という問題があります。ひとつは「風化」です。東京にいると、 震災の復興は十分進んでいると思う方も多いのですが、やはり(被災地の)沿岸部では住宅再建 も手間取っていますし、宮城県に限っても、今でも4万8,000人の方が仮設住宅で不自由な暮ら しをしています。もうひとつは「風評被害」です。今でも被災3県の産品を敬遠される傾向があ りますが、流通しているのは、すべて基準をクリアしている安全なものですので、安心して食して いただきたい。この2つの「風」をしっかりと克服しないといけません。さらに、昨年10月公表 された復興庁の資料によれば、いまなお被災3県では震災孤児が241名、震災遺児は1537名 を数えており、震災孤児・遺児へのきめ細やかな対応も必要です。

今回、このすばらしい企画は、被災地の最前線でご活躍の皆さんにとって本当に大きな励みになると思います。心より厚く感謝と御礼を申し上げて、お祝いのご挨拶に代えさせていただきます。 本日は誠におめでとうございます。



衆議院議員 すずき 俊一氏

私たちはあの震災で大変大きな被害を受けました。しかしそこから学んだもの、得たものもあります。ひとつは日本全国の、全世界の、今後の減災、防災対策につなげるべきことを知ったこと。そして日本において、NPOをはじめボランティアの精神、無償の貢献という大きな文化が根づいたことです。今回、(被災地に) 大きな貢献をしている団体を nittoKAI が表彰されるのは、大変すばらしいことだと思います。我々被災地の人間として、この 5 年間にいただいた、国内外からの温かいご支援、ご貢献に応えて、これから 5 年間のうちに必ず復興をやり遂げる、そして新しい東北をつくっていくという気概をもって頑張ってまいります。復興はみなで力を合わせていかなければなりません。nittoKAI をはじめ、お集まりの皆さんも力を合わせてこの復興を最後までやり遂げるために頑張ってまいりましょう。本日のご盛会、誠におめでとうございます。



衆議院議員 高橋 ひなこ氏

表彰された皆様、そして 100 年以上前のことを忘れずに日本を応援してくださっているトルコの皆さん、また関係者の皆さんに感謝の気持ちを心からお伝えします。

皆さんは震災の日、あの時間、何をしていらっしゃったでしょうか。そして、それからどんなことをされたでしょうか。(私たちは)世界の本当に多くの皆様から応援をいただきました。そして今、復興に向けて頑張っている人がたくさんいます。けれども、たくさんの頑張っている人がまだ復興できないでいます。その人たちを支えている(被災地の団体などの)皆さんを応援する方々に心から敬意を表します。これからも日本政府、私たち国会議員、また今日お集まりの皆さん、被災地を応援してくださっている皆様とともに完全な復興を目指して頑張ります。どうぞ被災地をこれからもよろしくお願いいたします。

そしてトルコの皆さん、Thank you so much. ありがとうございました。



参議院議員 東 徹氏

私は和歌山の隣の大阪出身です。1月に妻と2人で「海難1890」という映画を見に行き、本当に感動して久しぶりに涙を流しました。(和歌山沖で)日本人がトルコの船に乗った人たちを助け、100年後にトルコの人たちが日本人を助けてくれた。100年以上経ってもこうやって感謝の気持ちを忘れずにいてくれることを本当にありがたいと思っております。nittoKAIの人たちが東日本大震災の復興支援をしている人たちをこうやって応援していただき感謝申し上げます。現在トルコもテロ等で非常に厳しい時にも関わらず、こうやって東日本大震災の復興を応援していただいていることに感謝いたします。また今日受賞された方をはじめ、多くの皆様にも感謝を申し上げ、我々もトルコのためにも、そしてまた東日本大震災復興のためにしっかりと取り組んでいきますので、どうぞよろしくお願いいたします。本日は誠にありがとうございました。



参議院議員 浜田 和幸氏

わが国では未曾有の大震災が 5 年前に起こりました。当時、日本がトルコの方々から応援していただいたように、これからもトルコの人たちと日本人が一緒に世界の難民問題や自然災害問題、経済問題に取り組んでいく、それが日本復興の光だけでなく、世界の復興、平和の光となることを心から祈念します。

メリチ駐日トルコ大使は「like-mindedness」、(つまりトルコと日本は)似た価値観や気持ちを持っている民族だと繰り返し言っておられます。この熱い思いを十分受け止め、これからも一緒に世界の平和と安定のために努力を重ねていきたいと願うものです。本日、受賞された4団体の皆さん、本当におめでとうございました。是非その(復興への)思いを東北から、日本全体へ、そしてアジア、世界へと広めていただければ、誇らしい時代の幕開けとなると確信しています。



和歌山県知事 仁坂 吉伸氏

日本復興の光大賞を受賞された皆さん、おめでとうございます。

「エルトゥールル号」 遭難事件は、1890 年 9 月に和歌山県串本町大島沖でトルコ軍艦エルトゥールル号が遭難し、地元住民の救助活動により 69 名の命が救われたという出来事です。現在も串本町では毎年慰霊祭が行われ、トルコとの交流が続いています。日本とトルコとが友好関係を築くきっかけともなりました。この物語は、日本・トルコ両国政府の応援を得て、「海難 1890」という映画にもなりました。

今日でもトルコの方々は、日本人の親切を忘れないでいてくださり、「テヘラン邦人救出」や東日本大震災時の多大な支援にもつながりました。私たちは、素晴らしい先人を誇りに思い、トルコの方々に助けてもらったことを忘れずに感謝し続けなければなりません。

日本・トルコ友好の原点の地である和歌山県知事として、東日本大震災からの復興に尽力されている受賞者の皆さん、エルトゥールル号事件の恩返しとして復興を願い賞を創設された日本トルコ 文化交流会に対して心から感謝申し上げ、敬意を表する次第です。

来賓からのメッセージ



衆議院議員 小池 百合子氏

第2回の「日本復興の光大賞」のご開催、誠におめでとうございます。受賞者の皆様方、さらに 復興にご尽力いただければと思います。まさしく日本とトルコは 100 年以上にわたって、その(友 好的な) 関係を築いてまいりました。 苦しみを分かち合い、助け合うということのみならず、楽しみ、 幸せを分かち合う、そんな仲間であればと思います。

日本とトルコ、式典の会場のほうには真っ赤なトルコ国旗、お月様とお星様がございます。そして 日本の日章旗には真っ白な地に真っ赤な太陽ということで、まさしく太陽と月と星、これほどいい コンビネーションはないのではと思います。これからますます日本とトルコの関係が発展していく ためにも、ユジェルさんをはじめとする nittoKAI の皆様方のご尽力にさらに期待を申し上げまし て、一言ご挨拶とさせていただきます。

本日はご開催、誠におめでとうございました。



衆議院議員 玄葉 光一郎氏

私は福島県の選出です。そういう意味で今日は御礼に参りました。トルコの方々がスポンサーを募っ て福島県、あるいは宮城県、岩手県で復興の光になろうと頑張っておられる皆様のために、こういっ た賞をつくっていただいた、そのことに心から御礼を申し上げたいと思います。ありがとうござい

エルトゥールル号以来の親日的な国トルコは私たち日本にとってもきわめて重要な国です。私も外 交を担当していたときにアンカラやイスタンブールに参りました。こうして恩返しをしていただける (トルコには)、いずれまた日本から恩返しをしっかりしなければなりません。

理不尽な 3.11 から懸命に前を向いて頑張ってこられた方々をこれからも発掘していただき、激励 していただけますように、重ねてお願い申し上げて感謝の言葉とさせていただきます。どうもあり がとうございます。



衆議院議員 左藤 章氏

今日は2回目の「復興の光大賞」、ありがたいきわみです。トルコの皆様方に日本の復興を支援し ていただいて、しっかりとサポートしていただけるのはうれしい限りであります。そして今日、受 賞された、計 4 団体の方々にも、これからも日本の復興と、そしてこの大事なトルコとの友好を含 めてしっかりやっていただければと思います。

私は父の時代から(日本・)トルコ友好議員連盟に入っております。そのため私も何度もトルコに 行きましたけれども、何度行っても楽しい良い街だなと思っております。これから日本とトルコの 友好がしっかりと、ますます深くなるように祈念いたします。

本当に今日、受賞された方々へ改めまして感謝申し上げます。ありがとうございます。

メディア紹介

第2回「日本復興の光大賞16」に関する掲載記事をご紹介します。

0

地域に「復興の光」 岩手の「大槌メディアセンター」に大賞

(2016年3月5日付け毎日新聞より)

大槌新聞が復興の光大賞 「次の世代まで送り届けたい」

(2016年3月9日付け朝日新聞より)



NPO[ashe] 特別賞 (2016年3月4日付け

日本復興の光大賞

福島民友より)





地域に「復興の光





大槌新聞「復興の光大賞」 東京のNPO選定 草の根情報発信評価 (2016年3月9日付け河北新報より)

みらいと(新地)特別賞 日本復興の光大賞 コミュニティー再生

(2016年3月4日付け福島民報より)